



2011年
(平成23年)
9月22日
木曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net

第十四号

キックオフのあとで、 考えた。

まずは「三宅島大学」の開校を、心から喜びたい。だが、「開校おめでとう！」という余韻に浸っているヒマはない。いよいよ、これからなのだ。

キックオフ講義で述べたが、大切なのは、誰もが「教わりたい欲求」だけではなく「教えたい欲求」も持っているということだ。どんなにささやかに思えることでも、「学び」をつうじて、ぼくたちの世界はどんどん豊かになる。だからこそ、誰もが弟子、誰もが師匠という関係性を、つねに意識しなければならぬ。いろいろなことを考えながら、日常生活にとけ込んだ、知恵や工夫への接近を試みよう。

「三宅島大学」の理念は、ゆるやかに身体になじませていかなければならない。それには、時間がかかる。そして、時間をかける甲斐がある。ぼくは、呪文のように建学の精神と夢を語り、島の形のロゴマークをいたるところに貼り付けていこうと思う。一回かぎりの

イベント型のプロジェクトは、もう終わりにしたい。永きにわたる関わりかたをつくろう。キックオフ講座では、その想いを表明したつもりだ。

『あしたばん』編集部も、覚悟を決めたほうがいい。この壮大な実験にどのように関わるのか。六月に創刊されたから、不定期ながらも、着実に紙面づくりがすすんできた。「三宅島大学」



考えた。

の開校を機に、『あしたばん』のあり方について、あらためて考えてみてはどうだろう。どこにでもある「よく知られた報道」になつてはダメだ。永きにわたる関わりのためのメディアとして、どうあるべきか。それが問われている。

ぼくの個人的な望みは、人びとの生活のなかのちいさな「ものがたり」を丁寧につぶさに綴るといふ姿勢を、いま以上にはつきりさせた紙面をつくることだ。写真入りの学生証を手にしたときの笑顔。ロゴマークのワッペンを胸につけたときの、ちよつと誇らしい気持ち。師匠に単位を認定してもらったワクワク。ひとつひとつは、些細な出来事に見えるかもしれない。だが、変革は、ちいさきへモノ・コトからはじまるのだ。

(加藤 文俊)

あしたばん編集部に 受講生が！

二十一日におこなわれた、「かわら版をつくろう」の授業に、さっそく鈴木則子さんの姿があった。鈴木さんは開校式にも参加され、二十日に『Future Sketch Workshop』で使われたノートに、手書きでいくつか記事になりそうなことをメモしてくれていた。

電気の普及、プロパンガスの普及、電話の普及などの出来事から当時の三宅島での暮らしぶりに話を広げて、何を食べていたのか、どのような働き方をしていたか、どのように自然と付き合っていたかなど、島で生きるということについて詳細に何うことができ

た。印象に残ったのは、嫌なことなんて何一つなかったという言葉。当時の暮らしを聞くと、小学校に入ると家の働き手として農作業や家畜の世話など様々な仕事を手伝いながら学校にも通っていたそうで、今では考えられない生活があった。

しかし、確かに大変だけど、すべて楽しんでたことだった。忘れられないほどきれいな風景に出会ったり、厳しい環境でも強く根をはったり、花を咲かせる姿があったり、自然と付き合うなかでいつも発見があったから、楽しんでた。どんな状況でもあきらめずに何か意味があるはずだと話せるから、嫌なことがなかったと話し



てくれた。実感のこもった「自然から学ぶ」という言葉が染み入ると同時に、それはやはり、三宅島には豊かな自然があるからこそなのだと思う。

きつと私は、三宅島で培われてきた生き方、自然に向き合う態度を学び、そして自分自身が自然から多くのことを学べるようにならなくてはいい。『かわら版をつくろう』という授業で、むしろ私の方が多くのことを教えてもらっていた。

初めての講座でまさに、島で学び、島で考え、島で教える、という三宅島大学のコンセプトを実感した。三宅島の方々にとっては当たり前になってしまっていることのなから、掘り起こしていかねければもつたない。そしてその過程で私たちが見つけたものから、島に還せるものもあるはず。丁寧に、出会うことすべてに向き合っていきたい。

(飯田 達彦)

僕の足、島の石、人の意志。

三宅島大学で自分の企画(講座)を持つ。これは、そのリサーチの一日の記録だ。この時点で決まっているのは「僕は島を一周走って、パフォーマンスをする」ということ。それは自分のやりたいことでもある。だが果たしてそれがどのように島のためになるのか。朝。台風が近づいている。天気は晴れたり曇ったり、よく分からない。自分何が出来たのか、僕の頭の中も茫然としていた。

人に会えば何か道が開けるかもしれない。とにかくバスに乗ろう。阿古で降り、サントモで遅めの朝食。スパゲティを食べ、この後の動き方を考える。店主が、「三宅島大学の方ですか」と声をかけてくれた(僕は資料を広げ、胸に大学のワッペンを付けていた)。三宅島大学の名前はかなり広まっているようだ。だが、「やろう」としている内容が今ひとつ分からないので、とてもやる気はあっても、どのように関わっていくのか分からないというお話を伺った。僕も説明することを試みるのだが、「産業復興の…」「じゃあ産業復興って、何をやるの?」となって言葉に詰まってしまう。なんといいってもこのプロジェクトは昨日始まったばかり。会話をしていると、「理想の未来」と「今」とのギャップにたじろいでしま

まう。分かります。島の人の発信することが、もっとも必要だということがわかり、「頑張つてね」との声をあおにして、サントモを出発。雨宿りをしながら色々考える。行き着くのは、僕は「島の自然環境」を面白いと思っ

ているということだ。考えている企画でも、それが大きなテーマになる。そこで次の目的地を決める。島の自然を扱っている会社「伊豆緑産」だ。タバコを買おうと『はせがわ』に入る。そこで開校式で出会ったおばあちゃんに再会した。そうしたら、車で伊豆緑産まで送ってくれた。ノンアポで伊豆緑産の門を叩き、三宅島大学の名前を告げて「島の自然環境についてのお話を伺いたい」と告げた。伊豆緑産で働きながら島の自然ガイドもしている、西村さんという方が応対してくれた(なんとラッキーなのだろう)。

西村さんも、三宅島大学の名前自体は知っていた。僕が三宅島大学のパンフレットを渡すと、「こういうものがある」と分かってやすいと嬉しそうだった。『三宅島ジオマップ』(作成には西村さんも携わった)を見ながら、西村さんオスメの自然スポットについて色々な興味深いお話を伺った。それを一言でまとめてしまうと、「三宅島は(噴火後の裸地)から(スダジイなどの極相林)まで、緑が繁栄してゆく全ての過程を持つ希少な島」ということだ。そして話は、島の「人の魅力」に移っていった。過酷な自然環境のこの島で

は、人々はごく自然に助け合うのだ。車で送ってもらった事をはじめ、思い当たる節は数え上げればキリがない。

そして「自然の魅力」と「人の魅力」はきつと繋がっている、と西村さんは話してくれた。それを「三宅島大学」の目線で見ると、島の外に伝えて欲しい、と。

西村さん自身、島の魅力に取り憑かれて二〇〇〇年噴火の前にこちらに移住したらしい。そして噴火を経験し、また三宅島に戻ってきた。周りからは「なんでわざわざ島に戻るのか」という声もあつたらしい。また、「ガスマスクが要るんではない」というオーバーな誤解は今でもあるようだ。だから島の魅力を解き明かして「元気な三宅島」の印象を発信して欲しい、と語られた。そのような使命を持って、三宅島大学には頑張つて欲しい、と。話が終わり、僕は自分のやるべき方向性が何となく見えた気がする。

「自分の足で島を走る」という行為によって、「島の自然」と「人の魅力」、両方を拾うことが出来るのではないだろうか。それを作品として落とし込み、島の中、島の外、両方に向けて発信する。

来島は二回目。僕は島に到着した朝この島が好きになりかけていることに気づいた。やるしかないという気持ちだ。

(橋本匠)

インフォメーションデスクより

―授業、グッズ…三宅島大学の輪―

三宅島大学は開校式を終え、現在は「オリエンテーション」のような期間だ。学生証の交付や、近日中の講座の案内をしている。九月二十日から二十四日まで、あしたばん編集部は郷土資料館にインフォメーションデスクを構えながら『かわら版をつくる』講座を行っている。

六月からリサーチで三宅島を訪れているが、インフォメーションデスクの役割を果たしながら、また新たに島民の方々に出会うことができた。同じ「三宅島大学生」として、なんだか一体感を感じられることが嬉しい。学生証を見せ合ったり、受けた講座の感想を教え合ったりする。まさに、新学期の大学の雰囲気だ。

九月二十日。デスクに「今日はなにやってるの?」と女性お二人がいらっしゃった。民宿『オーシャンクラブ』の浅沼多津子さんと、近本杏里さん。開校記念講座のスケッチ釣りにも参加されていたそう。先生に、魚がよく見えるスポットを逆に教えたりしたの」と近本さん。感想や、授業のなかでの一コマの話を聞けるのは面白い。今度はこんな授業を受けたいという話にも発展するし、お互いの得意なことでも共有できる。この日は、ダイビングをされている近本さんのことも知る事

ができた。こんなふうに、三宅島大学のなかで共通項をたどりながら自分の「先生」をたくさん見つけていきたいと思う。

お話をした後、限定発売しているアソフィシャル「三宅島大学Tシャツ」もお買い上げいただいた。島の方に手にしていただくのは、これがはじめて。とてもうれしく、記念撮影までお願いしてしまつた。これから島の色々な場所で、『三宅島大学』や『あしたばんTシャツ』を目にする日も近いかもしれない。

少しずつ三宅島大学の輪が広がっていつてることを実感する、インフォメーションデスクでの出来事だつた。

(大西 未希)

